

技術・職業教育の実践

工藤 英太郎

一 はじめに

本分科会は中学・技術教育と高校職業教育（農業・工業・商業・水産など）の参加者で構成されている。

今回の参加者は一日目七名・二日目四名という少数であった。共同研究者の倉部氏、上原氏、町井氏、司会者の樋上氏、工藤氏の他に商業科より芦別高校・佐藤氏、工業科より室蘭工業高校・清水氏、江差北中学校・内糸氏の参加となった。農業科より音更高校・高野氏はレポート参加のみとなった。

研究課題は

（一） 技術・職業教育をめぐる状況

- ① 生徒を取り巻く状況（学習・生活・進路）
- ② 教育条件の整備と北海道の教育政策
- ③ 学校間・地域との連携
- ④ キャリア教育と技術・職業教育

（二）

- ① 中学校の教育実践（技術科）
- ② 高等学校の教育実践（専門学科）
- ③ 職業教育・職業訓練と学力保障
- ⑤ 学習指導要領の改訂と教育課程の編成

二 レポート報告

1 工業高校が地域と結びつくために 　　くおもちやの修理屋さんく

北海道旭川工業高等学校定時制 樋上 諭

2012年から、旭川市と協力して電気科の実習の授業を使い、市の施設（児童館、児童会、通園センター）で主に壊れたおもちゃなど様々な製品を直してきた。昨年度はパソコン分解講座が頓挫するなど、新しい取り組みが急務となっていた。課題として、樋上氏は前任校の富良野緑峰との違いに触れ、修理品の回収に苦慮していると述べている。今後は一般市民に向けた、修理品回収の方法の検討と実施に向けた取り組みをしたいと考えていた。北海道新聞旭川支社の知り合いの記者に「おもちやの修理を市民向けに報道してほしい」とお願いしたところ、12月4日の旭川版にカラーで掲載された。新聞記事を読んだ市民から修理品が徐々に集まった。30点ほどの修理品をコッソツと修理し、修復率は85%以上となった。今年度は担当する生徒が2人。修理は好きな生徒たちだったので黙々とこなしていた。

思いもよらないことが起きた。旭川市環境部より連絡があり、旭川市の行事に協力して欲しいとのことであった。以前に「旭川市子育て支援部」との関係はあったが、今回の依頼は「第1回旭川市環境審議会」の会議録を見るとよく理解できる。

“旭川工業高校の定時制の皆様から、溶接等の技術を磨くた

め、その材料として壊れたおもちゃの修理を引き受けていただけるということもあり、そういった方々と協力しながら、おもちゃの再利用に結び付けたいと考えている”というのが会議録の内容である。これを受けて15年6月26日〜28日に「みんなで学ぼう！あさひかわ環境フェスタ」が行われた。主催は旭川市・協力として、北海道旭川工業高等学校定時制、タカラトミー、おもちゃのヨシダ、NPO法人もりねっと北海道、旭川ウチダザリガニ防除隊である。

フェスタ当日。工具などを樋上氏の車に満載し、現地集合した。開始時刻の10時前から修理品が集まってきた。ラジコンやプラレール・ぬいぐるみなど様々である。多くは断線や接点不良、ギアの不良など生徒は手際よく修理していたようである。定時制の生徒はアルバイトの経験があるので、受付などの接客業務が非常に丁寧だったのが印象的だったようである。また修理をする様子を子どもたちが見ていて「すごいね」「なおせるの？」などと声をかけられる場面もあったようである。結局24品のおもちゃを修理し、3点は出来なかった。生徒にとって主体的に動き、市民に直接褒められ、励まされることにより多幸感や自己肯定感が育まれたようである。

今回のイベントが終わり総括をすると、持ち帰りの修理品の修理が完了したのが9月だった。結果28個を修理し、修理不能は3個であった。市民との直接のかかわりが出来たことの意味は大きい。今後は修理品を随時受け入れ、また市の環境部から依頼も受けているので継続的な取り組みが必要である。

多くの意見として、例えば「作業風景を動画等で記録できな

いのか」「後継者育成や指導者が変わっても普遍的に活動を続ける方法は？」などがあった。

2 「実習でのとりくみ」

北海道室蘭工業高等学校

清水 正貴

室蘭工業高校に勤務して4年目。清水氏が赴任した当初は5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）を知らない生徒が多かったとのこと。ものづくりの基本である5Sとは、

整理・・・「要る物」と「要らない物」を分け、「要らない物」を捨てること

整頓・・・「要るもの」を使いやすいように配置し、確実に表示すること

清掃・・・常に掃除をしてきれいな状態にし、尚且つ点検も行うこと

しつけ・・・決められたことを、いつも正しく守る習慣をつけること

清水氏が最初に取り組んだことは、実習室の整理。

実習室自体が5Sを徹底されていなかったことから、生徒と共に実習室の整理整頓に取り組む。特にアーク溶接類やガス溶接などを棚ごとに分けし、ラベルを貼っている。またペンチ、ニッパー、木槌も区分けした。のこぎりなどの刃先が鋭いものは同じ長さのものをまとめて、同じ方向に整えていた。この結果、一目でどこに何があるのかわかるようになり、生徒も5Sの重要性を理解したようである。

次に、授業と実習の結びつきを求めて真鍮ミニカーの製作を報告。昨年までは真鍮文鎮を作成していたが、もっと製作段階の工夫が必要と考え、ミニカーの作成となった。清水氏はあえて駄作を試走させることで生徒に良作を作るためのヒントを与えている。それは生徒自身が設計・製図・製作をすることである。そして完成した後に試走させ、より良い作品制作のためにレポートにまとめさせ、作品のプレゼンテーションを行うようにしている。

清水氏の勤務している高校が室蘭にあるということで、室蘭工業大学との連携を期待する声が町井氏や工藤氏からあった。

3 ビジネス実務を指導して（仮題）

〈異文化理解と国際教養〉

北海道芦別高等学校

佐藤 琢磨

芦別高校に異動になって2年目の佐藤氏。科目「ビジネス実務」についての考察を紹介。

ビジネス実務ではビジネス英語を学ぶ機会がある。佐藤氏は独自で作成したテキストを通してアマゾンの取引を模索している。例えばアメリカのアマゾンのホームページにアクセスする。サインインをしようとしたら、メールアドレスかモバイルナンバーが必要である。またクレジットカードの知識も購入には必要で、日本にはその知識を高校で教えることはほとんどない。また佐藤氏は英語を通しての異文化理解も深めるべきと述べている。一方でアントレプレナーの話はなかなか進んでいかない

とも指摘している。町井氏はその理由を「日本の学生は受け身の姿勢が多いからである」と指摘している。また上原氏からは他の職業教育においては英語を指導する場面があるのかと述べると、「工業科にはないが、高等専門学校のカリキュラムにはある」と樋上氏が述べている。

これまで英語を通しての商業教育を伝えてきた佐藤氏は、改めて教科書を始めとする教材作成の必要性を説いている。

4 普通科定時制高校における商業教育

北海道岩見沢東高等学校 倉部 静雄

今年赴任した岩見沢東高校定時制についての紹介。岩見沢市内を中心に三笠市や美唄市・栗山町などから生徒は登校している。非常に落ち着いており、特別指導が皆無である。「三修制」を活用して卒業する生徒もいる。

さて商業教育についてであるが、岩見沢東高校は普通科であることから教科「情報」が原則履修科目となっているが、情報・商業科は過去3人とも商業科教員が配置されており、情報の臨時免許を取得して教科情報の指導にあたっている。検定試験については、任意受験となっており簿記検定は全経を岩見沢緑陵高校で受験し、情報系の検定は日本情報処理検定協会の検定を受験している。

倉部氏は岩見沢東高校について、教科の専門性の深化から見ると、生徒への教科指導面では限界があるが、教科指導に關してはすべての責任を負う一方で、指導内容の裁量が幅広

いと指摘している。また何らかの事情で学びなおしたいと考える生徒に対して、いかに社会で生き残るかという知識や知恵を授けなければならぬと述べている。そのうえで、近年話題に上がる労働教育や消費者教育などをしっかりと行う必要があると考えている。

町井氏からは、夜間定時制高校において、普通科と職業科の違いはあるのか？特に商業科との違いがあるのかという質問がされた。

工藤氏からは以前、夜間定時制職業科に在籍した経験から「夜間定時制の生徒は、やっと通学できる環境にあるので、職業科や普通科というよりも近隣にあるかどうかで進学を決める場合がある。だから夜間定時制を生徒が少ないからという理由で統廃合を進める動きは違う」と述べている。

5 15年度「観光企画班」の取り組み

北海道福島商業高等学校 工藤 英太郎

科目「課題研究」についての報告。工藤氏は昨年グッズ作成担当であったが、地域とのかかわりも増えてきたので「観光企画」を担当したいと申し出て了承を得たのが「観光企画班」のスタートである。まずは町役場が「福島町総合戦略のアイデア」の募集をしていたので、意見を生徒と提案することにした。「冬に花火大会」「吉岡海底駅の再利用」などの意見が出たが、現実味がない。テレビ番組とのコラボ企画も考えたが、町長逮捕の報道もあり町の印象が低下したので、こ

の企画も諦めた。一方でふるさと応援隊の協力で「千軒そば」を題材にした企画や「ホテル」についての企画を取り上げることにした。

ここでは特に「ホテル」についての企画を報告する。この企画は「有志のホテルを見る会」から声をかけてもらい、夏休みにホテルの鑑賞会に参加した。これを町の企画に出来ないかと模索するうちに「知内町ホテルの会」の実践を聞く機会があり、難しさを実感する。1年で観光企画として実現するには難しいことを知った。ただこの企画は福島町と連携をしている東京農業大学オホーツク校の菅原准教授の目に止まる。なぜか。それは生徒がターゲットを絞った発表をしたことがあげられる。有志のホテル観賞会では女性の参加者がほとんどであった。この女性をいかに結びつけるかが課題になるが、本発表後には、ホテルの観賞会の参加者も見に来ており、その女性との連携も深めることが出来た。またホテルを今後いかに増やすのかという方法論の話題にもなった。それはホテルのエサであるカワニナやタニシを育てることや、そのカワニナやタニシのエサであるイタドリを含めた緑化整備の提案を生徒がしたのである。これを受けて福島町の総合計画案についてのパブリックコメントを提出した。

福島商業高校の課題研究は、工藤氏の前々任校の類似高校と異なり、通年での調査研究ができない。加えて、2単位続きでの授業が困難らしいので、外出しての調査研究が難しい。そのような状況ではあるが来年度も生徒の意向があれば、観光企画班を継続したい。

町井氏からは、生徒が町を知ることが非常に大事でその一つの方法としては有効である。また理科の教員や自然科学に興味のある教員との連携も必要であると述べている。町づくりの例として同志社大学や早稲田大学の実践を参考にすると良いというアドバイスもあった。また上川高校が中高一貫の目玉として大雪山の雪解け水を研究し、これが新聞などに取り上げられた例もあるという。この企画が少しでも前に進むようにという激励をいただいた。

発表後の動きであるが、ホテルを呼び寄せるためにLEDを樋上氏の在籍している旭川工業高校定時制に改良してもらった。学校間連携も大切である。

6 インターシップを終えた生徒たちの 「変化」について

―2015音更高校定時制農業科

2年生の事例から―

北海道音更高等学校定時制 高野 正

高野氏は所用のため欠席であったが、レポートを参加者で読み合わせて検証をした。本レポートはインターシップを終えた生徒たちの「変化」について探っている。

11名の生徒は自己肯定感が低く、高校生活に対する期待や学習への希望も薄く弱いので、インターシップに行く前は「やり遂げる自信がない」といった不安や戸惑いが多かったという。しかしながら全員が無遅刻・無欠席で出勤し、生徒たちが主体的に対処・行動し5日間をやりきった。

生徒からのアンケートを見ると「インターシップを終えてとても充実した」8名（11名中）。「とても自信がついた」5名（11名中）など一人ひとりの「自信の回復」「自己の再生」といった、ある種の成功感覚をつかみ取ったと言える。

高野氏は酒井貞彦「普通科高校のインターシップにおける生徒の「学び」の意義について——高校生感想文分析を通しての一考察——」を参照して、生徒の変化を感じ取ったようである。さらに音更高校定時農業科が閉科を迎えるにあたって、生徒全員が社会に出ていくための「学び直し」さらには「生き直し」の「時間」と「場所」となるように、彼女・彼らの個性や想いに寄り添いながら、残りの1年半の高校生活を励ましていきたいとまとめている。

清水氏からは室蘭工業高校でのインターシップを通して、実習先と生徒との間でコミュニケーションが取れなくて困っていることを問題視しており、あらゆる高校でこのようなことが起こっているのではないかと懸念している。また佐藤氏からは生徒のインターシップを通して、働き方について考えることが多いという。例えば職員が50名以上を超えたら産業医を入れる話は職場でもなかなか出てこないという。生徒が今後就職する職場ではどうなのかと懸念している。また上原氏からは夏に青年部の研究会に呼ばれて講演を行った際に、青年教員の多くが「学校に行きたくない」と思っており、過労が原因ではないかと指摘している。さらに町井氏からは中国との比較を取り上げていただき、例えば教員同士の炉辺談話などは日本と比べると非常に多く、コミュニケーションが非常に取れていると指

摘している。日本の教員の多忙化を解消しない限り、過労の要因が増えていくばかりであり、特に精神的にも追い詰められている青年教員が増えていることを懸念している。また高野氏のレポートに話を移すと地域連絡協議会や中小企業同友会とのやり取りについても重要であると述べている。

終わりに

研究会の場所が「かでる」から「札幌学院大学」に変更になって2年目。参加が困難になる心配があったが、例年通りの参加人数であった。学生の参加がなかったのがこれからの課題である。また高校の職業科は商業や工業・農業だけでなく、看護・水産など多岐にわたるが、参加者がなかったのが残念である。他の分科会とのセッションなど参加者を増やす工夫が必要であるのかもしれない。

町井氏が職業教育の定義を改めて考えなければいけないと指摘しており、上原氏からも参加者のレポートの充実や各職場における組合がどのように先生方の実践に関わっているのかが気になる」と指摘している。